

→「この本は、筆者が歩んできた人生の道で書いた論文を編集したものである。（はじめに）」・この本が生まれた背景には次のような著者の研究歴があります。日本の天理大学の朝鮮語学科を卒業後、韓国の江原大学哲学課大学院で、韓国の気哲学者崔漢綺について学位論文を得られ、その後京都フォーラム公共哲学共同研究所および金泰昌（当時）所長との出会いを通して、公共哲学および韓国思想史について視野を拡げ深め、その後中国の大学で日本語教育に従事するなかで儒教発祥の現場を実体験された後、韓国円光大学圓佛教思想研究所の研究教授として近代韓国の新宗教の共同研究に携わられました。この本は以上のような人生の歩みの中で、その都度書かれた論文からできています。

・この本は、開闢と実学と公共哲学という三つの領域について、韓中日の東アジア三国、特に韓国と日本に重点をおいて、「公共する哲学」の観点から追究した論文を、あらためて一冊の書物に編集したものです。第1部から第4部まで各部が3章からなり、その章がそれぞれ一つの独立した論文であると同時に各部の主題を構成する形で編集されています。

→啓発された点

① 第1部＜韓国の開闢＞第1章＜近代韓国公共性の展開と他者との連帯＞；韓国の開闢宗教の嚆矢である東学・天道教の流れを公共性の展開発展過程としてとらえなおしている点。東学が追求した公共性（「接」、東学農民軍）を天道教が継承し近代市民的公共性を志向して3.1独立運動に至る過程を公共性の観点から整理して理解できるようになった。

② 第3章＜大宗教 汎ツングース主義と普遍主義＞：大宗教の民族主義と普遍主義を汎ツングース主義の概念の導入によって統一的に把握している点。大宗教に現れた「白頭山南北七千万同胞」という新しい広汎な民族意識を当時の世界的思潮である民族主義の思潮の中に位置づけ、汎ツングース主義と命名した概念で分析することによって、新しい民族意識が普遍主義に通じる性格を併せ持つものであることを指摘している。

③ 第2部＜日本の開闢＞第1章＜近世日本思想の聖人像＞：安藤昌益が徹底的した聖人批判と共に、その聖人による「法世」を「自然世」に変革する方法まで示唆していることを強調している点。その方法とは「地位と権力に対する昌益の深い洞察」の上に、権力者に対する期待や革命による権力奪取の方法ではなく、「たとえいかに時間がかかろうと、在野の人々の間で共鳴者・共同実践者としての＜正人＞一人二人ずつ増やし、下から、中から、実行から授受に世の中を変えていく方法」（106）また、その指導者像として、「支配―追従関係に立脚した指導者像ではなく、個々人が道を体得し一人一人の実践によって喪失した自然世を回復する社会変革の主体になる「正人」的指導者像」の提示は、今日の我々にも示唆する所が大きいと言えよう。」（108）

④ 第3部＜実学の視覚＞第2章＜崔漢綺の宗教会通思想＞：気学に基づく崔漢綺の世界観と宗教観から宗教会通思想と「世界宗教」を説明し、さらにその宗教会通思想を韓国の宗教会通思想史の系譜に位置づけている点。

⑤ 第4部＜比較の視点＞第1章＜日本における退溪・栗谷・茶山研究の流れ＞：「退溪一尊」になった日本での韓国儒学研究において、明治以後の退溪像に質的な変化が現れる背景と意味をを既存の研究実績と一次資料をもとに明らかにしている点。

⑥ 第3章＜東西洋の公共性研究と韓国的公共性＞；朝鮮時代の公共の特徴の説明と共に、金泰昌先生による「韓国的公共性の根底にはこのハン（）の宇宙的生命または靈性が原動力または媒介として作動している。」という指摘。

→感想・質問

① 韓国の開闢宗教（東学・天道教－甑山教－圓佛教、大倂教）が社会変革（後天開闢の実現）の方法として個人の修養と教化における個別性（「縁源」主義）を重視している点は、第2部第1章で説明された安藤昌益の社会変革の方法（「正人」的指導者像の提示）と通じるところがある。その理由および現代的意義についてどのように考えられますか？

② 韓国の開闢宗教と日本の新宗教との比較について、どのように考えておられますか。特に韓国の開闢宗教の共通項として(1)人間尊重思想、(2)生態・環境・事物尊重思想、(3)新しい共同体と理想世界(に対する志向)、(4)宗教間対話・疎通・相互理解の公共志向性を基準とした場合、日本の新宗教についてどのような評価が可能でしょうか。

③ 戦後日本の実学研究の特徴として、「実際に成就された（西欧的）近代化の両面性を見て、近代の別の可能性を実学から探ろうとする」ことと指摘されていますが、この点については歴史的・文化的背景を異にしても同じく（西欧的）近代化を経験した日・中・韓の東アジア三国で共有が可能でしょうか？

④ 韓国の開闢宗教による社会変革には個人の修養が伴うという点と、韓国公共性の根底に「ハン（）の宇宙的生命または靈性が原動力または媒介として作動している。」という点の関係をどのように考えればいいでしょうか？